



第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材養成（学生・院生教育）

坂江, 渉
板垣, 貴志
河島, 真

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 13(平成26年度事業報告書):38-41

(Issue Date)

2015-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009340>



神・淡路大震災を知らない世代の取り組み—」を開催した。これは日本史演習(奥村弘担当)を受講する学部生が主体となって制作した展示であり、佐々木和子・吉川圭太・兒玉州平らが協力した。

④2015年1月9日

神戸大学六甲台講堂で開催された神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第3回シンポジウム「大震災を踏まえた教訓と課題——次世代へつなぐ」で、吉川圭太が「震災の記憶を歴史として伝えるために」と題して報告し、奥村弘がパネルディスカッションのコーディネーターを務めた。

また、同会場内において震災資料関連事業についてのポスター展示を行なった。

⑤1月23日

神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費(研究代表・奥村弘)の主催、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、科研S研究グループ、神戸大学都市安全研究センタープロジェクト(研究代表・奥村弘)、神戸大学附属図書館の共催による「第4回被災地図書館との情報交換会」(第15回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、科研S第2回地域歴史資料学研究会を兼ねる)を神戸大学附属図書館フロンティア館で開催した。

これは東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館・岩手県立図書館・東北大学附属図書館・宮城県図書館・長岡市立中央図書館文書資料室・国立国会図書館など東日本大震災資料関係機関と、神戸大学附属図書館・兵庫県立図書館など阪神間の震災資料関係機関の職員の方々とで現状や課題などについて意見交換を行なうものである。奥村弘が「大規模災害の記憶の共振とその歴史化——阪神・淡路大震災と東日本大震災の資料から考える」と題して報告を行なった。

また、午前中に同会場にて、田中洋史氏(長岡市立中央図書館文書資料室)を講師とする震災資料整理のワークショップを開催した。

⑥3月15日

仙台で開催された第3回国連防災世界会議パブリックフォーラムの被災大学間連携シンポジウム

「住民主体の災害復興と大学の役割」(神戸大学・岩手大学・東北大学主催、於仙台市情報・産業プラザ)において、奥村弘が「大災害の記憶と研究を伝えていく大学の役割」と題して報告した。

⑦3月15日

福島県立博物館で開催された「ふくしま震災遺産保全プロジェクト『震災遺産を考える』」に佐々木和子が参加し、震災遺構の保存継承などについて情報交換した。また同日、佐々木がいわき明星大学震災アーカイブ室を視察し、同室長の石丸純一氏と意見交換を行った。(文責・吉川圭太)

— 第5章 —

地域歴史遺産の活用をはかる人材養成 (学生・院生教育)

地域歴史遺産の活用をはかる リーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年(2004)度から平成18年(2006)度まで、工学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援を受け、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの開発に取り組んできた(文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム)。この事業によって開発された教育プログラムが、平成19年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では、「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」(前期課程)と「地域歴史遺産活用企画演習」(後期課程)の3科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。地域連携センターでは、平成19年度来、これら3つの科目の授業内容と素材を提供している。

3科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」(学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論A・B)は、

各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義である。また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解説・展示活用などの実践的方法を学び取る専門的演習である。さらに「地域歴史遺産活用企画演習」は、その活用ための企画展示等を自治体関係者や地域住民と一緒に企画考案するような実践的演習である。

専門コースの学生・院生は、この3つの講義・演習をすべて履修し、専門外コースの学生・院生は、まず「地域歴史遺産活用演習」を取得し、自分自身の興味にしたがって「地域歴史遺産活用企画演習」を履修することが望ましいと指導された。以下、7年度目に入った各授業、演習の中身の概要について記す。なお3つの講義のうち、「地域歴史遺産保全活用基礎論 A」は、博物館学科目の「博物館資料保存論」としても開講された。

(1) 地域歴史遺産活用研究 (地域歴史遺産保全活用基礎論 A = 前期、B = 後期)

<前期・A>

一昨年度から以下の3部に区分した講義をおこない、2013年3月に刊行された神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『地域歴史遺産保全活用ハンドブック兵庫県版』を副読本として使用している。

第Ⅰ部 地域社会の変容と地域歴史遺産

- ①04/11「序論(地域社会の未来のための地域歴史遺産)」(奥村弘・人文学研究科教授)
- ②04/18「市町村合併の現状と課題(近現代における地域社会の成り立ち)」(河島真・人文学研究科准教授)
- ③04/25「博物館の現状と課題(歴史系博物館論)」(古市晃・人文学研究科准教授)
- ④05/02「自治体史編纂事業の役割」(村井良介・人文学研究科地域連携センター研究員)

第Ⅱ部 新しい地域歴史資料学の構想

- ⑤05/09「地域歴史資料学とは何か」(板垣貴志・人文学研究科特命講師)
- ⑥05/16「地域歴史遺産の救出活動」(吉原大志・歴史資料ネットワーク運営委員)

⑦05/23「現代資料論—震災資料を手かがり」(佐々木和子・地域連携推進室研究員)

⑧05/30「企業資料とまちづくり——神戸・尼崎を中心に」(兒玉州平・人文学研究科助教)

⑨06/06「災害資料のもつ意味と展示・活用」(吉川圭太・人文学研究科助教)

⑩06/13「地域文献資料の活用」(木村修二・地域連携センター研究員)

第Ⅲ部 地域歴史遺産と地域歴史資料学を担う人々 (地域歴史資料の保存と活用)

⑪06/20「地域への愛着・関心とまちづくり—丹波市での取組」(前田結城・人文学研究科地域連携センター研究員。ゲスト上田脩・丹波市棚原自治会 PU 事業推進委員会)

⑫06/27「地域文書館(史料館)論」(辻川敦・尼崎市立地域研究史料館館長)

⑬07/04「歴史遺産の活用と大学のはたす役割」(坂江渉・地域連携センター研究員)

⑭07/11「地域歴史文化の担い手としての高校教員」(河島真・人文学研究科准教授)

⑮07/18「まとめ——書き残すことの意味」(市澤哲・人文学研究科教授。ゲスト大槻守・香寺町史研究室主宰)

<後期・B>

①10/03「序論——地域の歴史遺産とその保全」(奥村弘・人文学研究科教授)

②10/10「文化財とはなにか」(村上裕道・兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長)

③10/17「兵庫県内の地域の文化財——埋蔵文化財とはなにか」(山下史朗・兵庫県教育委員会事務局文化財課副課長兼文化財班長)

④10/24「兵庫県内の地域の文化財——史跡・文化的景観」(岡崎正雄・兵庫県立考古博物館社会教育推進専門員)

④10/31「地域の文化財の発見」(黒田龍二・工学部教授)

⑥11/07「兵庫県内の地域の文化財—仏像を中心に」(神戸佳文・兵庫県立歴史博物館学芸課長)

⑦11/14「景観復元とまちの形成—地図、地形環境と土地の履歴」(菊地真・人文学研究科准教授)

- ⑧ 11/21「地域歴史遺産としての自然現象——ウミガメの上陸・産卵」(坂江渉・人文学研究科地域連携センター研究員)
- ⑨ 11/28「遺産の保存をめぐって——農業と農耕文化を中心に」(堀尾尚志・神戸大学農学部名誉教授)
- ⑩ 12/05「大規模自然災害と文化財救出、その効果について」(内田俊秀・京都造形芸術大学名誉教授)
- ⑪ 12/12「地域歴史遺産の保全・継承と活用を考える——襖の下張り資料」(尾立和則・前京都造形芸術大学教授)
- ⑫ 12/19「歴史的建造物の保存・修復」(足立裕司・神戸大学名誉教授)
- ⑬ 01/09「博物館運営と歴史遺産の活用」(山地秀俊・経済経営研究所教授)
- ⑭ 01/16「都市景観とまちづくり」(三輪康一・工学部教授)
- ⑮ 01/23「障害者にやさしい歴史遺産の活用」(高田哲・医学部教授)

<全体を通じて>

本年度も昨年度に引き続き、Aの講義を「地域文献史料」に関わる講義として、Bをそれ以外の「地域歴史遺産」、すなわち歴史的建築物・美術工芸・埋蔵文化財・農業遺産・都市景観等に関わる講義として編成した。

毎回の講義には、原則として坂江がコーディネーター役として参加し、講師と受講生のやりとりや質疑応答等を受け持った。これにより全体としての講義の主旨やねらいがある程度伝わったと考えられる。前期の受講生は90名近く、後期の受講生は30名程度であった(文学部・工学部・経済学部・経営学部・発達科学部など)。(文責・坂江渉)

(2) 地域歴史遺産活用演習 (学部授業名は「地域歴史遺産活用演習 A」、大学院文学研究科は「地域歴史遺産活用演習」、人文学研究科は「地域歴史遺産活用企画演習」)

本演習は、地域歴史遺産の保全・活用を実践しうる地域リーダーの養成を目的としている。特に文献史料の取り扱い、整理、目録作成、解説をお

こなう基礎的な能力を実践的に習得することを目的とした演習として、夏期と冬期に2回にわたり事前指導講義と合宿形式(集中講義)でおこなわれた。授業の履修者のほか、日本史研究室の院生・学生などの希望者も参加した。

夏期(2014年9月8日～10日)は、神戸大学篠山フィールドステーションにておこなわれた。篠山市日置地区で発見された中西家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解説した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。

冬期(2015年2月22日～23日)は、三木市旧玉置家住宅にておこなわれた。三木市吉川町上松区有文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解説した。最終日には、上松地区の方々を交えて班ごとに整理した史料の内容を紹介する成果報告会を開催した。(文責・板垣貴志)

地歴科教育論C

「資質の高い教員養成推進プログラム」として採択され、2006～2007年度に実施した「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」以来、現在まで継続してきている兵庫県立御影高校との連携事業を、今年度も引き続き実施した。センター関係教員が指導する「地歴科教育論C」では、御影高校総合人文コースの課題学習を指導することを通じて、地域文化を担う社会科・地歴科教員の実践力を身に付ける授業を行った。今年度は「コープ神戸」(2班)、「六甲山牧場」「神戸まつりとサンバ」「神戸とムスリム」「パンダ」「コミュニティバス」「神戸とアート」「須磨の漁業」「灘五郷」の9つのテーマ(10班)に分かれて研究を行い、このうち「神戸とムスリム」「コミュニティバス」の2つの研究が、11月22日(土)開催に開催された関西学院大学総合政策学部主催のリサーチフェアに参加し、「コミュニティバス」の研究が審査員特別奨励賞を受賞した。

また、受講生の中から、2月10日には世界史2人、日本史3人が、御影高校2年生のクラスで実習を行い、同校教員の指導を受けた。世界史はイスラ

ム教の成立とその後の拡張を取扱い、日本史は江戸時代の百姓一揆と明治の自由民権運動を対比させ、村を基盤とする運動形態の類似性を指摘する授業を行った。(文責・河島真)

— 第6章 —

平成26年度科学研究費補助金・基盤研究(S) 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて」の研究支援

今年度からスタートした上記テーマの新規科学研究は、前年度までの科学研究「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の成果を踏まえ、東日本大震災後の新たな課題(津波、放射能被害など)及び海溝型地震への対応をさらに進め、「災害文化」形成に資する地域歴史資料学を確立することを目的としている。

研究体制について特に学内について記すと、研究代表者及び学内の分担者・協力者・特命教員によって構成される神戸大学コアグループが研究全体の進行を日常的に把握・調整し、人文学研究科地域連携センターが拠点的研究施設となる。

初年度となる2014年度は、学内外あわせて4回の地域歴史資料学研究会を開催した。第1回研究会(9月12日、於仙台)、第2回研究会(兼第4回被災地図書館との情報交換会、2015年1月23日、於神戸大学附属図書館)、第3回研究会「2014年8月豪雨災害対応研究会」(3月24日、於神戸大学文学部)、第4回研究会「淡路市地域資料調査会」(3月27日、於淡路市)。

11月29日には本科学研究グループが主催団体の一つである被災地フォーラム「ふるさとの歴史と記憶をつなぐ」を仙台市博物館で開催し、約70名が参加した。11月30日には石巻市内において被災地巡検を行なった。

被災資料・歴史資料の調査・保全としては、2014年8月豪雨で被害を受けた丹波市・京都府福

知山市・広島市などでの保全活動を支援した。また、10月の台風19号を受けて洲本市の被災状況調査に協力した。このほか、宮城県での被災資料保全活動などを支援した。

本年度は他団体と協力し、次のような研究事業を実施した。まず、独立行政法人国立文化財機構が本年度から進めている文化財防災ネットワーク推進事業の一環として、12月8日から10日の3日間にわたり同機構アソシエイト・フェローを対象とした研修が神戸大学文学部学生ホールで開催された(人文学研究科地域連携センター共催、科研S研究グループ協力)。同研修では阪神・淡路大震災における資料救出やその後の活用、南海トラフ地震への対策などがテーマとなった。また、2015年2月14～15日には、歴史資料ネットワークと独立行政法人国立文化財機構の主催による「全国史料ネット研究交流集会」(於神戸国際会館3階・野村證券神戸支店アネックスホール)に、人文学研究科地域連携センターと科研S研究グループが共催した。

国際的な研究交流としては、独立行政法人国立文化財機構に協力して2015年2月22～27日にかけて奥村弘・吉川圭太・内田俊秀(京都造形芸術大学)がイタリアのトリノ、フィレンツェ、ローマにおいて資料救出・修復や文化財防災に関する調査を実施した。また、2015年3月14～18日に仙台で開催された第3回国連防災世界会議に参加し、国内外の文化財防災等に関する情報収集や意見交換を行なった。なお、同世界会議のパブリックフォーラム「住民主体の災害復興と大学の役割」(3月15日、於仙台市情報・産業プラザ)では、奥村弘が報告した。

そのほかの研究活動としては、阪神・淡路大震災時の資料保全活動のデータ整理を進めた。また、分担者の三村昌司(東京未来大学)が東京で進めている石川準吉関係資料の整理について、河島真・兒玉州平両名が助言・協力した。そのほか、市民と共同した地域歴史資料の保全・活用実践事例の調査(兵庫県朝来市)などの研究を展開した。

(文責・吉川圭太)